





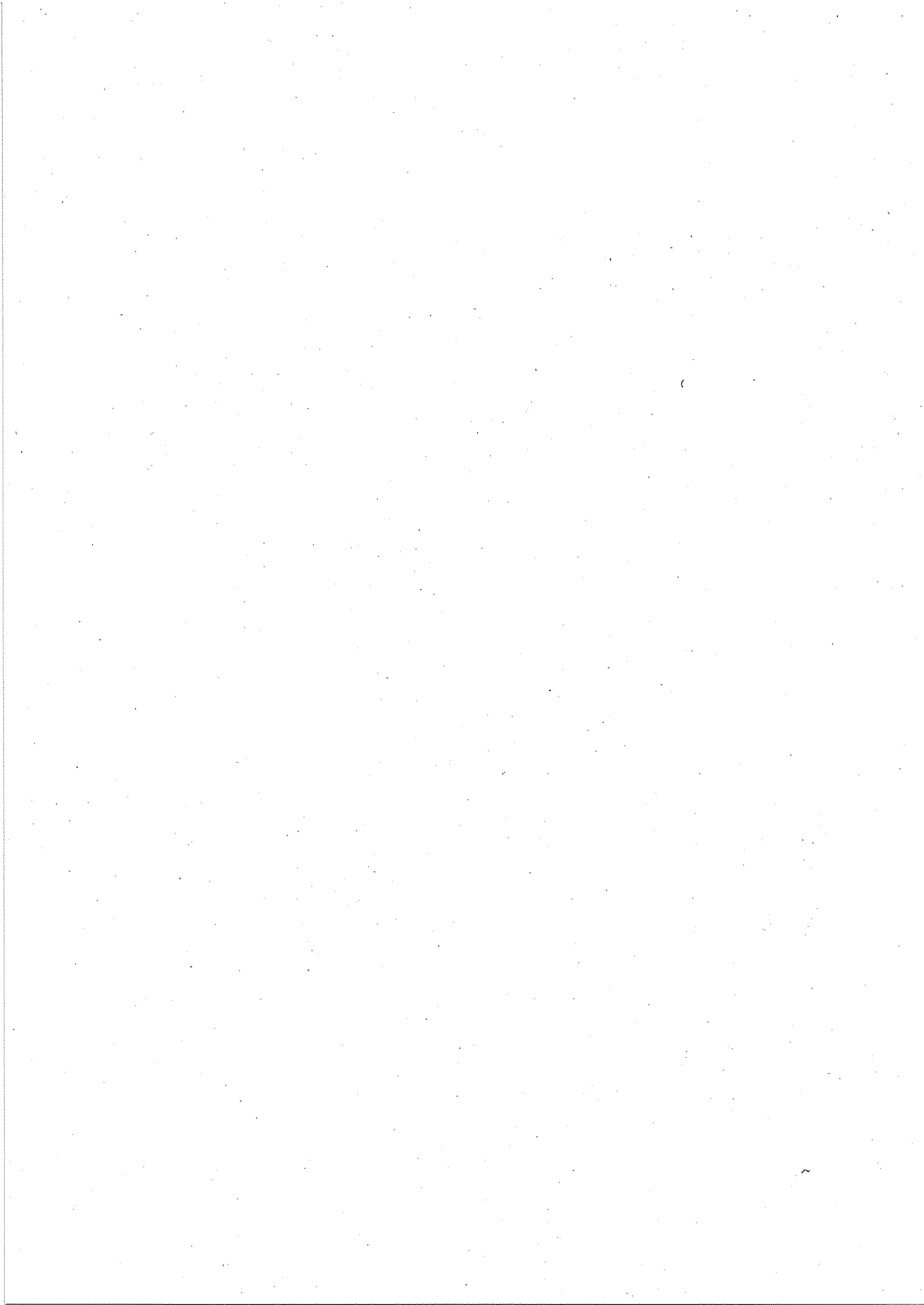
国 語 問 題

はじめに、これを読むこと。

- 1 この問題用紙は十三ページある。
- 2 解答用紙に印刷されている受験番号が正しいかどうか、受験票と照合し、確認すること。
- 3 解答用紙の所定の欄に氏名を記入すること。
- 4 解答は、すべて解答用紙の所定の欄にマークするか、または所定の欄に記述すること。
- 5 解答は、必ず鉛筆又はシャープペンシル(いずれもHB・黒)で記入すること。
- 6 訂正は、消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
- 7 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。また所定の欄以外のところには、絶対に記入しないこと。
- 8 問題に指定された数より多くマークしないこと。
- 9 解答用紙は、持ち帰らないこと。
- 10 この問題用紙は、必ず持ち帰ること。
- 11 試験時間は、六十分である。
- 12 解答をマークする場合は、下の記入例を参照して、正しくマークすること。

(マークの記入例)

良い例	悪い例
	  



次の文章を読んで、後の問に答えよ。(本文の表記を一部改めた箇所がある)

自己と他者。ギリシアの時代より長く哲学の命題であり続けたこの問題を考えるとき、まず私たちがイメージするのは、目に見える個体としての自己、そしてやはり目に見えるものとしての他者という存在であろう。内なる自己というものを考えるときにも、その思考のベースには、一枚の皮膚によって囲われた一人の人間としての「私」があるはずである。

自己を考えるとき、

I

としての他者を考えることが重要になるように、「内なる自己」というものに目を向けようとする、自己を取り巻く外の環境に目を向けざるを得ない。自分のまわりにあるすべてが、外部環境として自己の生存に

何らかの関わりを持っている。単純な図式である。

しかし、自分という存在は、どこまでが自分なのかと考えると、少し事情は複雑になるだろう。一枚の皮膚に囲われた内部が自分である。生物学的にはいちおうそのように言えそうだが、実は私たち自己の内部には他者をも棲まわせている。単に哲学的な思考の枠組みではなく、生物としての私たち生命の内側には、他の生命が棲み着いているのである。

たとえば腸のなかのバクテリア(腸内細菌)。抗菌石鹸、抗菌まな板、抗菌靴下等、抗菌アイテムが流行しているが、どんなに抗菌に気をつけても、私たちの内部、特に大腸の中には数えきれないバクテリアが棲んでいる。最近の研究によれば、その数1000種類、600兆〜1000兆個。試みに、それらあなた一人の大腸のなかに棲んでいるバクテリアを一列に並べてみればよい。実に地球を15〜25周もできる長さになることだろう。彼らが勝手に棲んでいるのではなくて、棲んでもらっているのである。彼らなしでは、私たちは正常な生活を営めない。私たち(自己の内部)には、それだけの数の他者がいる。

B 腸の中は、トポロジ(位相空間)的には外部であり、バクテリアは(自己の外部)にある存在なのだと言うことはできるだろう。それでは、あなたの個々の細胞のなかに、他者が棲んでいるということは知っているだろうか。実は、私たちが作っている60兆個の細胞の、一つ一つの内部には、かつてのバクテリアの子孫が棲んでいるのである。ミトコンドリアと呼ばれて、個々の細胞にエネルギーを供給してくれている細胞内の存在、その大切な細胞小器官は、太古の昔、私たちの内部に棲

み着いて、今もなお私たちと共生しているバクテリアの成れの果て(失礼)、子孫なのである。彼らは自分自身のDNAを持っていて、分裂しながら数を増やしている。このミトコンドリアは他者なのか自己なのか。自己と他者は生物学的にもややこしい。

私たちが皮膚によって外界から区画されているように、個々の細胞というレベルで見た生命も、一枚の細胞膜によって外界から区画されている。バクテリアとか酵母などの単細胞生物は、一個の細胞が一個の生命である。個々の生命体は、細胞膜によって外部の環境と区画されることによって、生命なのである。私たちが多細胞生物においても、個々の細胞は、それぞれ細胞膜によって外部、または他の細胞と区画されている。

そもそも生命は、膜で囲われることによって、はじめて個々の生命が(細胞)という単位として誕生したのである。外界から区画されること、これは生命であることの最低必要条件の一つである。自分を囲む膜がきっちりと自己の内部と外部とを区画してくれなければ、生命としての安定性と、

II は保てない。

事実、細胞の「生き死に」をチェックする方法として、私たち哺乳類の細胞にある種の染色液を加えて、細胞が染まるかどうかでチェックする方法がある。染まれば、細胞膜に孔が開いているので、その細胞は死んでおり、染まらなければ細胞膜が完全に閉じていることから、それは生細胞であると判断される。つまり生きているとは、自己をまわりの環境から(区画化)することが前提とされているのである。

しかし、生命の誕生に際して、細胞(生命)が膜によって区画されたとき、細胞は同時に決定的な自己矛盾を抱え込むことになってしまった。膜によって外界と隔てられなければ生命としては存在できないが、いつぼうで、外界と完全に隔離されてしまえば、これまた生命としての活動を営むことはできないのである。

生命が生命であるためには、代謝活動が必須である。外部から栄養物や酸素などの生存に必要な多くの分子、物質を取り込み、それを自己の形成に必須なさまざまな高分子やエネルギーの生産のために使わなければならない。外部から遮断されると、反応(代謝)に必要な物質の供給がストップし、かつ反応に必要なエネルギーの供給も遮断される。これでは反応が自己完

結的になり、エントロピー増大の法則に従って、完全なる無秩序へと生命活動は減衰するほかはない。

いっぽうで、代謝活動のなかでできた廃棄物(ゴミ)は、外の環境に排出しなければ、これまた生きてはゆけない。たとえばタンパク質は、老化したり、外部からのさまざまなストレスによって壊れてしまう(変性)。この変性したタンパク質を分解処理し、廃棄処分してやらなければ、神経変性疾患などを引き起こすことになってしまう。アルツハイマー病やパーキンソン病、筋萎縮性側索硬化症(ALS)などのよく知られた神経変性疾患の原因は、多くの場合、変性タンパク質の処理機構のハタ^アンによるものである。

つまり、生命は外部に対して「閉じつつ、開いて」いなければならないのである。事実細胞膜は、文字通り水も漏らさぬ完全性(インテグリティ)を保ちながら、必要に応じて、水やアミノ酸、グルコースやさまざまなイオンをオウセイ^イに細胞内部に取り込むことができる。また逆に、インスリンやヘモグロビンなどの血中タンパク質を細胞外部に分泌し、不要なタンパク質のゴミやイオンも細胞外に放出する。「閉じて」いなければ生命は維持できないが、「閉じて」ばかりいては、同じく生命活動は維持できない。

「閉じつつ、開く」、このジレンマを克服するために、あるいはアポリア(困難)を解決するために、生命は、その誕生以来、さまざまな方法を編み出してきた。そのひとつひとつをつぶさに見るとき、そのあまりの見事さに思わず息を呑む。私はもちろん進化論を信じるものであるが、その個々の工夫、トリックの多様性と巧妙さに触れるとき、これらが単に時間^Cのなかで、試行錯誤の果てに成ったシステムとは、にわかには信じられないことが多い。どこかに全能の存在があり、その頭の中で練りに練った、考えに考えられた^a拳^a句^aの工夫ではないかと疑ってみたくもなるのである。

さらに生命の本質として「変わりつつ、変わらない」という性質もきわめて大切なものである。私たち個体は、一個の受精卵が細胞分裂を重ね、60兆個という数の細胞を生み出してきたのであるが、単に増えるだけでは個体を形成することはできず、分裂の過程でさまざまな細胞の個性を生み出しても来た。発生の途中で、あるものは血液細胞になり、あるものは筋肉細胞や神経細胞になる。これを分化と言うが、常に変化しつづけることは生命の大切な性質である。

いっぽうで外界は常に変化し、私たちの生命に重大な影響を与えようとしている。それら外界の急激な変化に対して、その都度、その変化のままに自身を変えていたのでは、生命の自律性と統一性はたちまち危機に瀕することにならざるを得ない。外界の変化を取り込み、対応しつつ、全体としては、内部の変化を最小限に抑える必要がある。これを恒常性(ホメオスタシス)の維持と言う。あくまで

III

これをガ^ウンコに死守しなければ、生命を維持してゆくことはできない。この恒常性維持機構はまた、膜を介した外界との物質や情報のやり取りを前提、そして必須のものとしている。

外界の変化にやわらかく対応し、それをやり過ごしつつ、己はしっかりと維持していく。そんなイメージである。内部の恒常性を守るために、外部にどのように対応し、折り合いをつけてゆくか。その手^b練手管が大切になってくるのは、何も対人関係や外交関係だけではなさそうである。アイデンティティの確保は、恒常性の維持を前提としていっているとんでもないだろう。

私は細胞の巧妙な仕組みを、すぐに現実世界にアナロジー(類比)として持ち込もうとは考えていない。しかし、たとえば、自己と他者、わが国と世界の他の国々との関係、人間という存在とそれを取り巻く地球環境との関わり、などといった問題が浮かび上がってきたとき、我々が意識しない極小の世界でも、細胞という生命体は、それら自己矛盾にも近い困難な問題に対して、彼らなりの素晴らしい方法で対処していることを知っていることは、どこかで考えの余裕というか、風通しの良さを与えてくれるものではないかと思っている。

(永田和宏『生命の内と外』による)

問一 傍線ア「ハタン」、傍線イ「オウセイ」、傍線ウ「ガンコ」をそれぞれ漢字に改めて記せ。

問二 傍線 a「挙句」、傍線 b「手練手管」の漢字の読みをそれぞれひらがなで記せ。

問三 空欄 I にあてはまる言葉として最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

- ① 逆説
- ② 類比
- ③ 対概念
- ④ 相対性

問四 傍線A「単純な図式」に基づいて人間が作り出したものの例を、本文中から六字で抜き出して記せ。

問五 傍線B「腸の中は、トポロジー(位相空間)的には外部であり、バクテリアは自己の外部にある存在なのだと言うことはできるだろう」と言えるのはなぜか。最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

- ① 腸の中を科学的に観察するためには、内なる自己というより外部空間として位置付けた方が良いから。
- ② 腸の中は、一枚の皮膚によって囲われた自己というモデルを裏返したものとみなすことができるから。
- ③ 腸の中に寄生するバクテリアは人間とは異なる生命体であり、自己の内に含むことができないから。
- ④ 腸の中を、人間存在を維持するための外的環境と捉えることで、内なる自己の発見がなされるから。

問六 空欄 II にあてはまる言葉として最も適切なものを、本文中から七字で抜き出して記せ。

問七 傍線C「時間のなかで、試行錯誤の果てに成ったシステム」であるということが最も端的に表れている本文中の具体例は何か。次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

- ① ミトコンドリア
- ② 酵母
- ③ タンパク質
- ④ 受精卵

問八 空欄 III

にあてはまる語句として最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

- ① 自己は他者
- ② 他者は他者
- ③ 自己は自己
- ④ 他者は自己

問九 傍線D「それら自己矛盾にも近い困難な問題に対して、彼らなりの素晴らしい方法で対処している」について、当てはまらないものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

- ① 個体は細胞分裂を繰り返しながら増殖していき、また同時に、様々な細胞の個性が発揮されてきたこと。
- ② 生命は代謝活動を行うことによつて外部と関わりながら、秩序立った内部環境を常に維持してきたこと。
- ③ 膜で囲われることによつて生命は恒常的な「個」として存在することができるようになったということ。
- ④ 生物は長年の進化の過程の中で外的環境に働きかけを行い、自己の内部空間を拡張してきたということ。

問十 二重傍線「自己」と他者。ギリシアの時代より長く哲学の命題であり続けたこの問題を考えるとき」とあるが、この問題について筆者はどのような見解を持っているか。筆者が望ましいとする「自己」のあり様が述べられている最も適切な一文を本文中から探し出して、最初と最後の五字をそれぞれ記せ(句読点を含む)。

二

次の文章は、江戸時代後期に成立した『井関隆子日記』天保一一（一八四〇）年三月八日の条の一節である。作者は江戸の桜の名所である上野の山（東叡山寛永寺の一带）に花見に出かけ、寺の門前付近までやって来た。これを読んで、後の問に答えよ。（一部表記等を改めた箇所がある）

このわたりより、その山にゆく人袖を連ねたり。かかればおのづから誘はるるやうにてのほりぬ。まづ山祇の宮拝み奉りつつ見るに、うるはしうきらめきたる御殿のわたりみな花になりて、白木綿かけて奉るかと思ゆ。ここはあるが中の高き岡にて、右りの方は高くそびえれば、かぎりもなうはるかに見渡され、末はほのぼのと霞込めたる気色目もあやなり。左りのかたはなだらかに花の木ども隙なきに、中堂へ詣づる大路を隔て、松に立まじり並びたてる桜のひまびまより、麓の池鏡のごとく見渡されたる、えもいはん方なし。げに都に近き比叡の山をうつされたるものしく、かの近江の湖を見渡す気色かかるらむと思ひやらる。このなだらかなる岡のわたりに、広う敷物して湯を沸かし、香煎てふ物を入れてひさぐ者あまたあり。つどへる人、小筒・破籠やうの物うちひらき、所々に群れ居てうち興じ、花見る男女あまたなり。おのがじしは心ゆくめれど、物の隔てもなく酒飲み物食ひちらしたる様、はしたなう人わろ氣に見ゆ。

かの白雲と見えつるはそら目にて、ここに来て木のもとに立ち寄れば、梢をわたる春風にはらはらとふりかかるは雪なりけり。

白雲と見つるはいづら山ざくら袖にかかるは雪にざりける

かの露をも玉と見するなる蓮葉は、この麓の池に生ひ出るに、山の桜さへさまさまに、人をあざむくにかと思ふもをかし。はたしかのみにあらず、うす色にほひたるもあまた有りて、

めざまし。花桜と詠めりしは、かく紅なるを詠めりと言へる、さもやあるらむ。これぞ異物に似ず、白雲の八重立つ山、白雪の降りおける峯に咲きまじるとも、紛ふ事なくげに花と見ゆめれば、花桜とや続けたりけん。さる中にも昔家万葉なるをば、拾遺集にものせられたれば、めでたき続けがらなめり。この歌変化の物もめでたりけむ、形も見えぬもの声ばかりして、「こぼれてにほふ花桜かな」とうちながめける事、

^D今昔物語に見えたり。梅の紅は古くより詠めれど、桜は専ら白きをめづる事今はた同じう、めでたきかぎりの花なりけり。然れども紅にほふ桜、目の前に多かるをいかかはせん。昔より歌に詠み来れることは、同じすぢをいささか言ひかへ、はた続けがらもよからねど、ためしあるにゆるさるにや、さてあるを、大方新たに詠み出るものは、人の耳なれぬ氣にこそあらめ、無下におしくだし言ひけちななどすること、今の世の常なり。さりとして己が独り言せむを、たれかは口ふたがむなど思ふものから、言ひ出ればいと浅ましうつたなし。

^E紅にさける岡べの桜ばな夕日のにほふ雲とこそ見れ

注 山祇の宮 —— 寛永寺の境内にあつた山王社。

中堂 —— 寛永寺の根本中堂。

麓の池 —— 不忍池。

香煎 —— 穀類を煎つてひいた粉に、紫蘇や陳皮などを加え、白湯に溶いて飲む飲み物。

かの露をも玉と見するなる蓮葉 —— 『古今和歌集』中の和歌「はちす葉のにごりに染まぬ心もてなにかは露を玉とあ

ざむく」(卷三・僧正遍昭)をふまえる。

菅家万葉なるをば、拾遺集にもせられたれば —— 菅家万葉は平安時代の歌集『新撰万葉集』の別称。「菅家万葉集

の中 浅緑野辺の霞はつつめどもこぼれてにほふ花桜かな」(『拾遺和歌集』卷一・読み人しらす)。

形も見えぬものの……うちながめける事 —— 『今昔物語集』卷二七・第二八「於京極殿、有詠古歌音語」中の説話。

問一 傍線1・2を口語訳せよ。

1 目もあやなり

2 はしたなう人わる気に見ゆ

問二 傍線A「白木綿かけて奉るかと思ゆ」とあるが、具体的には何がどのように見えたのか。最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

- ① 社殿一面に散りかかった桜の花びらが、神様がお召しになる白い着物の模様のように見えた。
- ② 社殿付近にある木々の満開の桜が、白い幣帛へいはくを枝にかけて神様にささげたかのように見えた。
- ③ 社殿前の桜に日の光が降りそそぎ、神様が白い着物をお召しになっているかのように見えた。
- ④ 社殿の廊下に花を咲かせた桜の枝がかかって、神様にささげられた白い幣帛のように見えた。

問三 傍線B「ざりける」は、本来五文字で記されるべきところが、四文字に短縮されたものである。短縮される以前の形に直して、平仮名五文字で記せ。

問四 傍線C「をかし」とあるが、作者は何について「をかし」と感じたのか。最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 麓の池に生えている蓮の葉は、葉の上の露を玉と見せかけて人をあざむくと『古今和歌集』に詠まれているのに、他の景物と紛らわしい山の桜とは異なつて、見間違えようがなさそうに思えること。

② 麓の池に生えている蓮の葉は、清い心で人をあざむくことがないと『古今和歌集』に詠まれているが、同じ場所に咲いている山の桜は、降る雪を雲に見間違わせようと企んでいるように思えること。

③ 麓の池に生えている蓮の葉は、葉の上の露を玉と見せかけて人をあざむくと『古今和歌集』に詠まれているが、のみならず山の桜までが、自身を雲や雪に見間違わせようとしているように思えること。

④ 麓の池に生えている蓮の葉は、清い心で人をあざむくことがないと『古今和歌集』に詠まれているのに、山の桜の散る花びらを、雪と見間違わせないようにすることまではできなさそうに思えること。

問五 本文中の空欄にあてはまる語句として、最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① はなばなと

② しらじらと

③ ほのぼのと

④ さやさやと

問六 傍線D「今昔物語」(今昔物語集)より以前に成立した説話集を、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 古今著聞集

② 宇治拾遺物語

③ 十訓抄

④ 日本霊異記

問七 傍線E「紅にさける岡への桜はな夕日のにほふ雲とこそ見れ」の和歌について、作者はどのようなことを考えながらこの歌を創作したのか。最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 今の世においては、昔より繰り返し使われてきた趣向に、少しだけ新奇な要素を付け加えた和歌が好まれるのだから、独自性に乏しく言葉のつながり具合も良くない歌を口ずさんだとしても、咎める人はいないだろうと考え、この歌を創作した。

② 今の世においては、過去に詠まれた古歌であれば少々難点があっても賞賛し、当世に新しく詠まれた歌はおおむね貶める風潮にあるので、他人の評価など気にせず、紅色に咲き誇る眼前の桜をありのままに詠もうと考え、この歌を創作した。

③ 今の世においては、これまであまり歌に詠まれなかった景物でも、過去に詠まれた例が少しでもあれば許容されるのが通例だから、言葉遣いなどの拙い歌になりそうだが、同道の歌人たちに気後れすることなく詠もうと考え、この歌を創作した。

④ 今の世においては、過去に詠まれた例があるかどうかを重視し、目新しいものを詠むのを厭うのが和歌の通例であるが、眼前に咲いている桜の多くが紅色のものであり、また他人の耳に入れるつもりもないのだからと考えて、この歌を創作した。

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。(返り点・送り仮名を省いた箇所がある)

賀茂^ノ行祭、都^ト輦^{レン}之俗、多^ク車^ニ上^ニ観^ル。動^カ乃^チ争^フ地^ヲ。平氏^シ盛^ン時、小松^ノ

平内府、以^テ二^ニ車^ヲ四^ノ五^ノ両^ヲ出^デ観^ル。観^ル者^ハ偏^{ハク}側^{ソク}、已^ニ無^シ可^キ駐^ト地^ト。衆^ヲ以^テ、公^ヲ

至^ラ、恐^ク当^ハニ^ニ被^レ驅^ル除^セ。果^シ退^ケ数^ケ車^ヲ、而^シ進^ム公^ノ車^ヲ。既^ニ察^ス其^ノ退^ク者^ヲ、皆^ハ空^ク車^ト

也。公^ハ豫^メ令^ビ占^セ觀^ル地^ヲ、至^リ乃^チ相^フ更^ル耳^ヲ。咸^ニ云^フ、「公^ノ之^ハ温^ク仁^ク、不^ク欲^ス以^テ貴^ク

勢奪人爾。」

注 賀茂行祭 —— 京都の賀茂神社のまつり、葵祭のこと。

都輦之俗 —— 都の人々。

小松平内府 —— 平清盛の嫡男、平重盛。

偏側 —— 狭くて窮屈なさま。

(『大東世語』より)

問一 傍線 a「動」・ b「令」の読みとして、それぞれ適切なものを、次の中から一つずつ選び出して、その番号をマークせよ。

- ① うごけば
- ② させ
- ③ ややもすれば
- ④ どうじて
- ⑤ つひには
- ⑥ しめ
- ⑦ られ

問二 傍線 A「乘以」とあるが、その内容はどこまでか。次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

- ① 駆除
- ② 公車
- ③ 空車也
- ④ 相更耳

問三 傍線 B「至乃相更耳」を、内容がわかるように口語訳せよ。

問四 傍線 Cを書き下し文にすると、「貴勢を以て人を奪ふことを欲せざるのみ」となる。これをふまえて、「欲」と「奪」の部分に返り点を付けよ。(送り仮名は不要である)

問五 本文の内容に合致するものとして最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

- ① 重盛は、高位高官にふさわしい態度を、常に厳守していた。
- ② 重盛は、部下に、自己の高慢な態度を諫めるように指示していた。
- ③ 重盛は、良い場所で行列を観たかったが、強引な方法は取らなかつた。
- ④ 重盛は、よく観える場所を、あたり構わず捜しまわつた。